

ロシアの哲学的思想の本来の使命であるように見える。根源的なロシア思想は終末論的な諸問題に向かい、黙示録的色彩を帯びている。ここにその西欧思想に対して異色をなすものがあり、またこれこそロシア思想になによりも宗教的歴史哲学の性格を与える。

十九世紀末期のロシアでは黙示録的な精神状態が発達した。それは世界の終末と反キリストの出現というような悲観論の色彩を帯びた意識と結びついた。人々は新しいキリスト教の時代や神の国の到来よりも、むしろ反キリストの国の到来を予期していた。ベルジャーエフが当時の終末論的な思想家として注目するのは、ドストエーフスキイ、トルストイ、ウラジミール・ソロヴィヨフ、フォードロフ、ヘーゲル左派のポーランドの哲学者チュージェフスキイなどである。特にドストエーフスキイはニーチェやキュルケゴールと並んで、十九世紀における悲劇の啓示者である。彼の創作活動は、ただ究極のもの、終末をめざすものだけに關心を持ち、徹頭徹尾終末論的であり、他のいずれのロシア作家よりも予言者的要素が強くみとめられる。

ラインホルド・ニーバーの現実主義

澤井治郎

本発表は、二〇世紀中葉のアメリカにおいて活躍し、現代の最も有名な神学者、あるいは公共の神学者（public theologian）といわれたラインホルド・ニーバー（Reinhold Niebuhr

一八九二—一九七一）の宗教思想の中から、特に彼の思想を特徴づける現実主義を巡る議論を取りあげ、その展開を明らかにしようとするものである。彼は、「キリスト教的現実主義」（Christian realism）というキリスト教神学における思想潮流の代表的人物として知られ、その思想は多くの政治家、政治学者に大きな影響を与えたといわれている。ニーバーは第二次大戦の終結が近づくと、彼の現実主義の立場から、ソ連の共産主義を意識しながら、民主主義の擁護や国際関係における力の均衡論を提唱するようになる。後に対ソ冷戦構造のイデオロゲなどと言われるようになるのはその所以である。本発表では、その前段階にあたる初期からの戦時中までの現実主義を巡る議論、さらに彼の「キリスト教現実主義」の根幹を成す彼の人間理解を概観し、彼の現実主義の議論全体を再解釈する足がかりとしたい。

ニーバーによれば現実主義という語の基本的な意味は、特定の確立された基準にとらわれず、社会的、政治的状況のすべての要素を考慮に入れる態度であり、さらには理想主義は社会的な現実に対して幻想を抱いているという批判をも含意するものである。しかしながら、一人の人間が社会的、政治的状況を解釈しようとする際、ほぼ不可避免的にその判断基準が媒介するものである。ニーバーの場合、これまでの研究が指摘しているのは、彼の初期の出世作となった『道德的人間と非道德的社会』（一九三二年）の頃にはマルクス主義に親和的で革命による社会の変容に多くを期待していたが、主著である『人間の本性とその定め』（全二巻、一九四一—一九四三年）の頃には革命へ

の期待は弱まり、よりキリスト教的な人間観に集中するようになったというものである。

ニーバーの初期の著作から中期に書かれた主著にかけての現実主義を巡る議論の展開を概観して分かるのは以下のことである。『道徳的人間と非道徳的社会』において「現実主義」は社会の不正義が権力の不均衡に由来し、その是正に倫理的な要請は無効であり政治的、経済的な強制力が必要であるといった想定が込められている。この態度は、社会状況の考察と人間性の神学的な理解という二つの極に基づいている。この時期のニーバーの主要な問題関心は、不平等の是正、そしてその手段としての「階級闘争」に向かっていた。そこでは社会状況の分析が前面に現れ、人間性の理解がその闘争の冷酷さを和らげるといふ、いささか補助的な役割をあてがわれている。

しかし、彼の中期になると、その社会状況の考察と人間性の理解との関係は逆転する。人間性の、特に罪の理解が深められ、社会状況の考察はその人間の罪深さから引き出される。人間は罪深いゆえに正しい共同体倫理を形成することができず、力の均衡論が最も妥当な政策として主張されるのである。

千葉眞氏は、ニーバーによる現実主義の展開について、第二次大戦前は社会的弱者の視点から社会を批判する下からの現実主義、大戦後はアメリカ国家に対してその高慢さを批判する上からの現実主義と、その変化を指摘している。千葉氏はこの違いを、ニーバーが戦後、国務省の対外政策の顧問をするようになった立場との関係において捉えているが、今後、こうした視点とニーバーの思考構造の変化との関連に着目して、第二次大

戦後のニーバーの現実主義に関する議論について研究を進めた
い。

リタ・バセにおける「聖なる怒り」

伊 原 木 詩 乃

「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べるはならない。食べると必ず死んでしまう』」(創世記二・一六―一七)。楽園の住人アダムとエバに禁じられた知、すなわち善悪の知識とは、善から悪まで一切を知ることの意味する。それは神にのみ属する領域であり、キリスト教世界では、この実を食するような試みは自己神化だと糾弾され、厳しく禁じられてきた。

しかし、精神療法家アリス・ミラーは、善悪の区別を知らずにいることを理想状態と認め、従順と無知を条件に至福を約束するような楽園を、「闇教育」の産物として徹底的に批判する。闇教育とは、子どもの意志を挫き、公然と、あるいは一見それとわからないように、力を振るい、操り、脅迫して、子どもを従順な臣下に変える狙いをもって行なわれる教育である。ミラーにとって知を禁じる残酷な脚本は、まさに闇教育の原則に則って教育された人間によって書かれたテキストである。聖書テキストを記した詩人たちの父親は、例外なく、子供たちの発見欲を喜ばず、不可能なことを期待し罰する父親だった。そのた